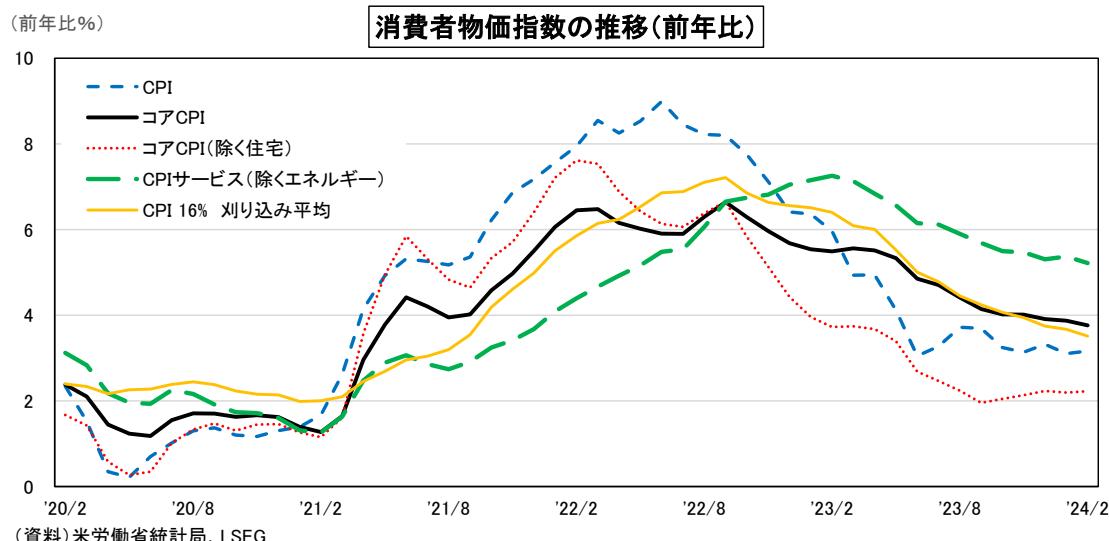


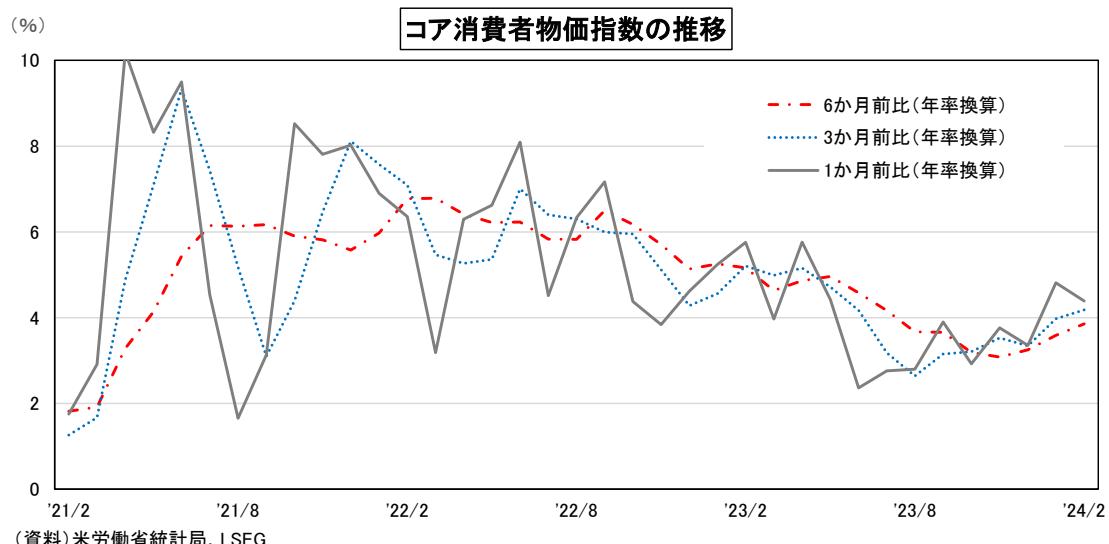
リサーチ&ソリューション第1部 佐古 佳史

(米国)利下げが遠のいた印象を与えた2月CPI

2月の消費者物価指数(CPI)は、総合が前年比3.2%(前月比は0.4%)、食料とエネルギーを除くコアは同3.8%(同0.4%)となった。エネルギーを除いたコアサービスの上昇率は前月比0.5%と1月(同0.7%)から鈍化した。内訳をみると住宅費は同0.4%、輸送サービスは同1.4%、医療サービスは▲0.1%となった。全体としては、2月CPIは1月から小幅に鈍化したものの、下げ渋りが続いている。



コアCPIについて、より足元の動きを確認しやすい1、3、6か月前比(年率換算)を計算すると、それぞれ4.4%、4.2%、3.9%となった。23年末と比べると、足元では加速傾向となっている。このため、インフレ率が(PCEデフレーターで計った)2%物価目標に向かっているとは言い難い。



また、11日に公表されたニューヨーク連銀調査による2月の期待インフレ率を確認すると、1年先の期待インフレ率は変わらずの3.0%となった。一方で、3年先の期待インフレ率は1月から0.3ポイント上昇の2.7%、5年先は同0.4ポイント上昇の2.9%となり、長期の期待インフレ率が上昇した。

パウエルFRB議長は6日の議会証言にて、24年内の利下げが適切となる可能性が高い点を指摘しつつも、利下げを行うにはインフレ率が持続的に2%に向かっているという確信を得る必要があると述べた。足元では、他のFOMC参加者も同様の発言をしている。こうした発言と合わせて考えると、2月CPIは利下げが遠のいた印象を与える内容となっただろう。筆者は依然として6月FOMCからの利下げを想定しているものの、利下げ開始時期が後ずれする可能性は徐々に高まっていると思われる。